

全国学力・学習状況調査について～ちばっ子の学力向上に向けて～

千葉県総合教育センター
学 力 調 査 部
研究指導主事 峯 浩之

1 主題設定の理由

全国学力・学習状況調査は、平成 19 年度から毎年実施（平成 23 年度及び令和 2 年度を除く）されており、実施にあたり、文部科学省は「調査の目的」を以下のように掲げている。

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、
○全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析することによって、国や全ての教育委員会における教育施策の成果と課題を分析し、その改善を図る
○学校における個々の児童生徒への教育指導や学習状況の改善・充実等に役立てる
○そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する
(文部科学省実施要領引用)

このことを踏まえ、各学校には、自校の結果分析を行い、結果を活用することにより指導改善等を図ることが求められる。また、当センターには、県全体の結果を分析し、各学校の有効な活用を促すことで、児童生徒の学力向上を図ることが求められる。このことから、上記の主題を設定した。

2 研究の目的

令和 4 年度全国学力・学習状況調査における調査結果を分析し、本県の課題を整理して改善方策について研究することで、各学校による調査の活用を促進し、児童生徒の学力向上を図ることを目的とする。

3 研究の計画（令和 4 年度単年度研究）

	(1) 本県の令和 4 年度調査 結果について	(2) 全国学力・学習状況調査 の活用について
5 月～	調査問題の分析	校内体制の在り方に関する考察
7 月～	調査結果の分析	研修実施による分析
12 月～	研究のまとめ	

4 研究の概要

令和 4 年度全国学力・学習状況調査における本県の結果について、全国と比較したり、前回及び前々回調査の結果と比較したりしながら、多角的に分析する。また、各学校における指導改善や学校経営の改善を促進するために、各学校の校内体制の在り方や、調査結果を用いた校内研修の充実に向けた効果的な取組について考察する。

5 研究の内容

(1) 本県の令和4年度調査結果について

ア 教科に関する調査結果

平均正答率について、小学校国語、同算数、同理科は全国と同等、中学校国語、同数学、同理科は全国よりも低く、経年で比較してもその状況が顕著であった（表1及び表2、図1）。また、特に、記述式問題において課題があり、小学校及び中学校の全教科で全国との差が大きい状況であった（図2及び図3）。

※表1及び表2、図1～図3についての留意事項

- ・データはすべて千葉市を含めたものである。
- ・数値は文部科学省発表によるものであり、H28以降、都道府県の平均正答率は四捨五入した整数値で公表されている。
- ・R2は新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により調査が実施されなかった。
- ・「理科」は3年に1度程度実施されている。
- ・「指数」とは、あるデータを基準として同種の別データを相対的な大きさを表す数値のことであり、ここでは全国平均正答率を100として本県の平均正答率を百分率で表している。

表1：小学校の平均正答率

	R4本県（全国）	R3本県（全国） ※理科はH30	H31本県（全国） ※理科はH27
国語	66（65.6）	65（64.7）	63（63.8）
算数	63（63.2）	70（70.2）	66（66.6）
理科	63（63.3）	61（60.3）	61.9（60.8）

表2：中学校の平均正答率

	R4本県（全国）	R3本県（全国） ※理科はH30	H31本県（全国） ※理科はH27
国語	68（69.0）	65（64.6）	72（72.8）
数学	50（51.4）	56（57.2）	58（59.8）
理科	48（49.3）	65（66.1）	52.0（53.0）

図1：平均正答率の状況（全国を基準とした本県の指数）

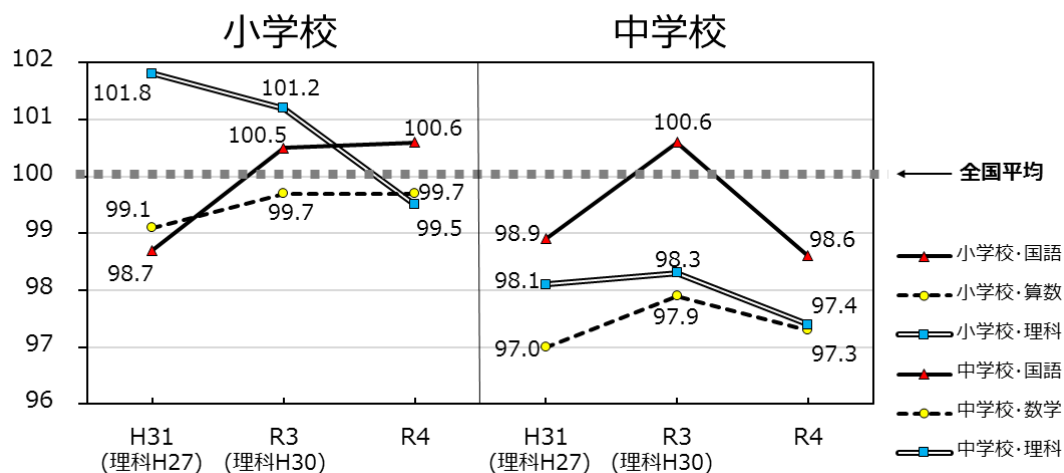


図 2：項目別平均正答率の状況（全国を基準とした本県の指数）

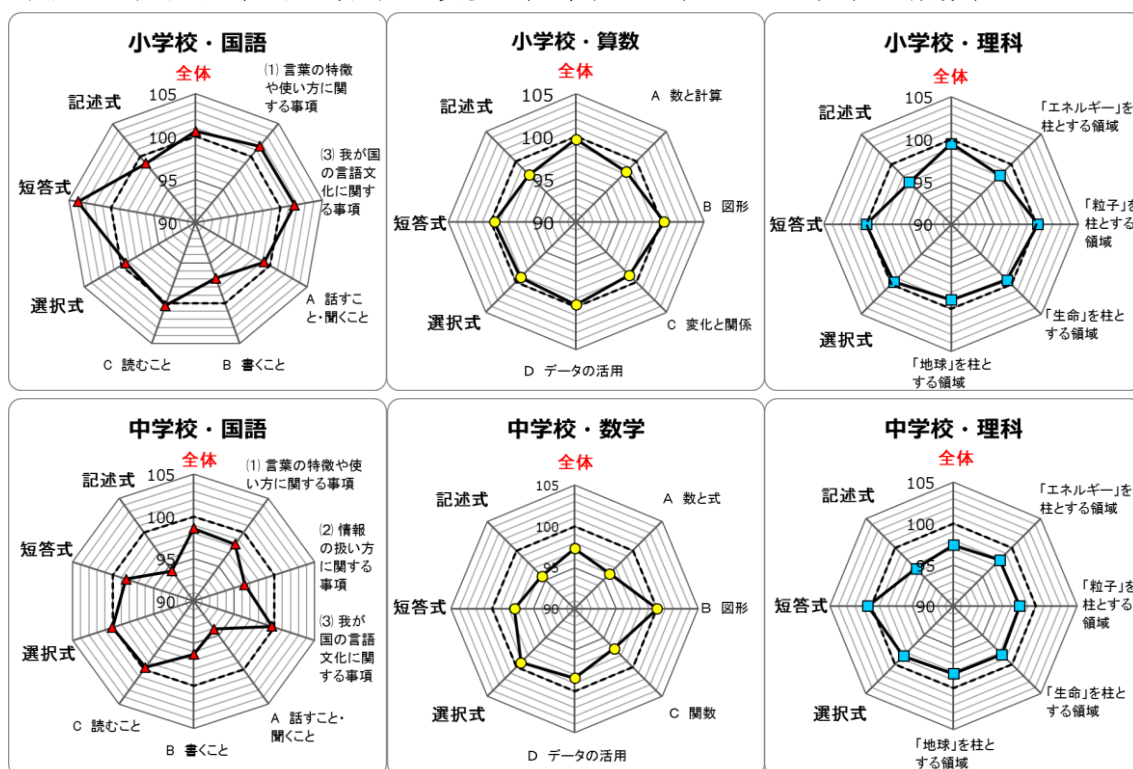
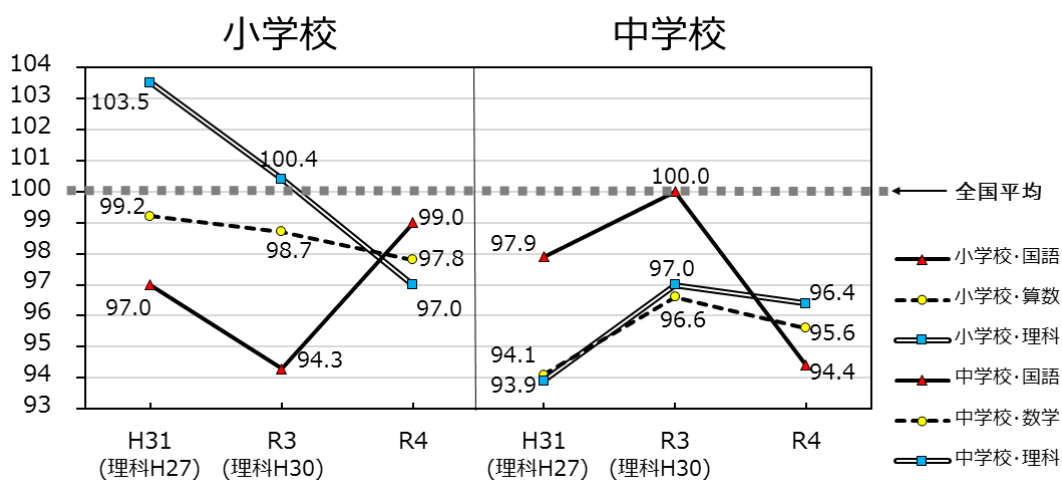


図 3：記述式問題の平均正答率の状況（全国を基準とした本県の指数）



イ 質問紙調査結果

質問紙調査は、児童生徒が回答するものと学校が回答するものとがある。児童生徒への質問内容は、「生活習慣・学習習慣」「規範意識・自己有用感」「学習に関する興味・関心」の領域で、学校への質問内容は「学校経営」「授業改善・生徒指導」「教科指導」の領域で構成されている。

本県の回答結果について分析したところ、教科に関する調査における平均正答率と相関が特に高い質問は、図 4～図 7 のとおりであった。

図 4 :【児童生徒質問紙 39】 5 年生まで〔1、2 年生のとき〕に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか

回答選択肢

当てはまる

どちらかといえば、当てはまらない

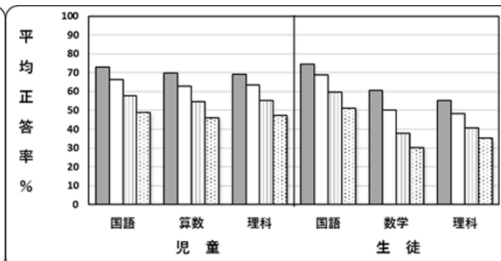
どちらかといえば、当てはまる

当てはまらない

<全国との比較>※千葉県含む



<回答結果と正答率の関連_本県>※千葉県含む



【肯定的回答の状況】

小学校：全国より－0.5 ポイント 中学校：全国より－1.8 ポイント

図 5 :【学校質問紙 23】 調査対象学年の児童〔生徒〕は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか

回答選択肢

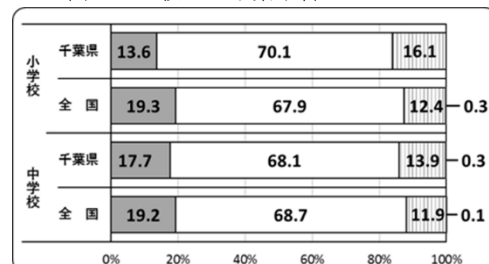
そう思う

どちらかといえば、そう思わない

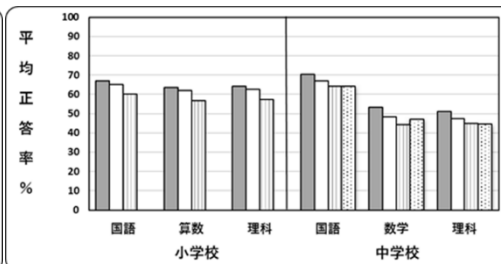
どちらかといえば、そう思う

そう思わない

<全国との比較>※千葉県含む



<回答結果と正答率の関連_本県>※千葉県含む



【肯定的回答の状況】

小学校：全国より－3.5 ポイント 中学校：全国より－2.1 ポイント

図 6 :【児童生徒質問紙 43】 学級の友達〔生徒〕との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか

回答選択肢

当てはまる

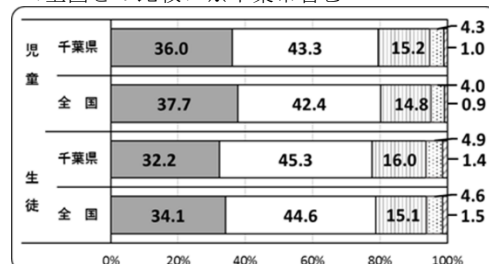
どちらかといえば、当てはまらない

学級の友達〔生徒〕との間で話し合う活動を行っていない

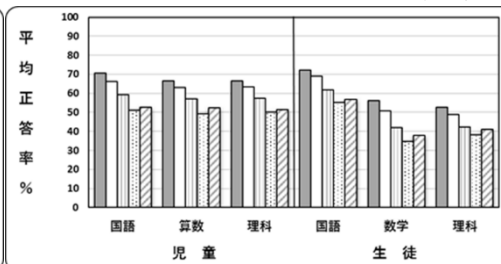
どちらかといえば、当てはまる

当てはまらない

<全国との比較>※千葉県含む



<回答結果と正答率の関連_本県>※千葉県含む



【肯定的回答の状況】

小学校：全国より－0.8 ポイント 中学校：全国より－1.2 ポイント

図 7 :【学校質問紙 26】調査対象学年の児童〔生徒〕は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか

回答選択肢

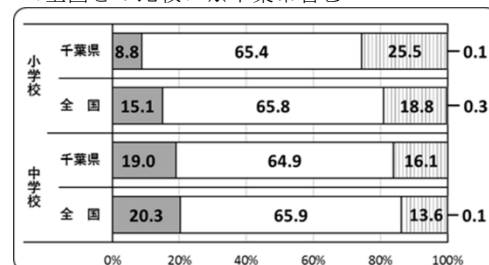
■ そう思う

▨ どちらかといえば、そう思わない

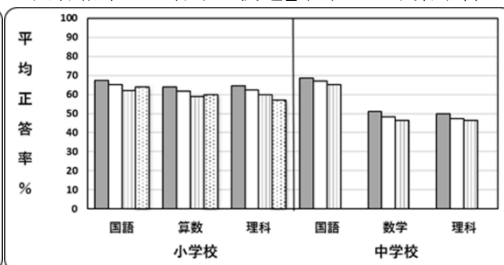
□ どちらかといえば、そう思う

▤ そう思わない

<全国との比較>※千葉県含む



<回答結果と正答率の関連_本県>※千葉県含む



【肯定的回答の状況】

小学校：全国より－6.7 ポイント 中学校：全国より－2.3 ポイント

ウ 学力向上に向けた授業改善のポイント

「ア 教科に関する調査結果」における本県の現状として、「全国と比較し、小学校の算数と理科について平均正答率がやや低く、中学校のすべての教科について平均正答率が低い」「特に、記述式で出題された設問について、全国よりも平均正答率が低い」ことなどが課題といえる。これらの課題に対して、「イ 質問紙調査結果」で示した「教科に関する調査における平均正答率と相関が特に高い質問」への回答状況から、授業改善のポイントとして以下の2点を挙げる。

1点目は、「課題の解決に向けた、自ら考え、自ら取り組む活動」として、児童生徒が「課題を明確化する」「解決の見通しをもつ」「情報を収集し調べる」「自分の考えを形成する」活動を充実させることである。2点目は、「自分の考えを深めたり、広げたりする話し合い活動」として、児童生徒が「自分の考えを伝える」「友達と互いに学び合う」「新たな考えに気づく」活動を充実させることである。

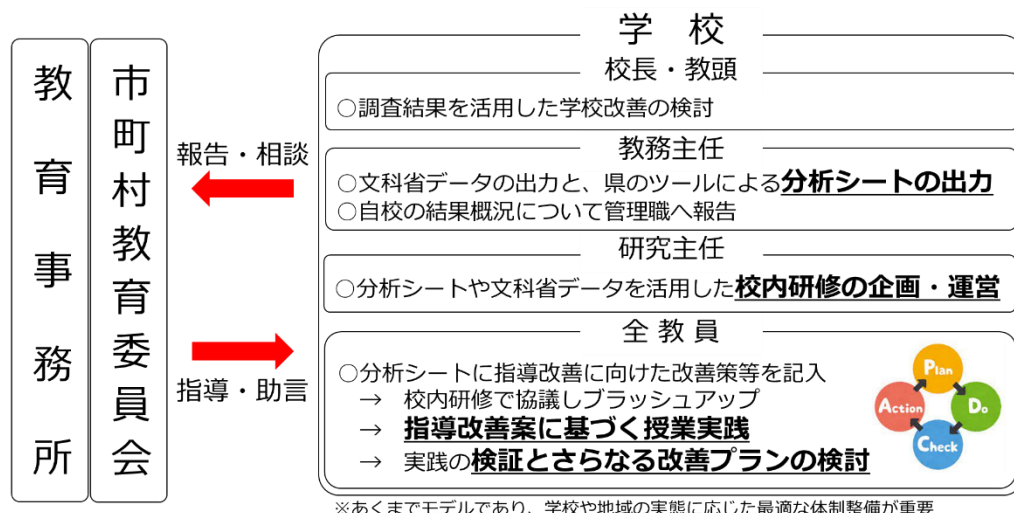
指導事項や児童生徒及び地域の実態に応じ、こうした活動を意図的、計画的に取り入れ、児童生徒の学力向上を図ることが重要であり、教員の資質向上とともに、指導改善の取組として充実させていくことが大切である。

(2) 全国学力・学習状況調査の活用について

ア 活用に関する校内体制モデル

活用に関する校内体制については、概ね図8のような役割分担が想定される。ただし、学校や地域の実態に応じて最適な体制整備が求められることに留意が必要である。また、市町村教育委員会や教育事務所への報告・相談を行い、適切な指導・助言を仰ぐことも重要である。

図 8：活用に関する校内体制モデル



イ 県独自の「分析ツール」

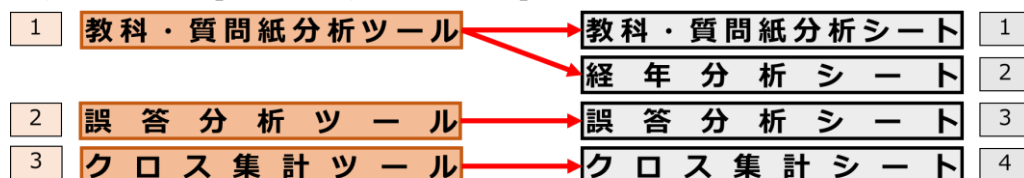
「分析ツール」は、文部科学省が提供する調査結果のデータを簡単な操作で可視化し、結果分析に基づく成果と課題の実態把握や、指導改善サイクルの確立を支援する自動計算ソフトである（図 9）。

分析ツールは 3 つあり、これらから 4 つの「分析シート」を出力することができる（図 10）。なお、市町村教育委員会を通じて各学校へマニュアルも提供しており、県内ほとんどの学校が分析ツールを活用している。

図 9：「分析ツール」とは（ダウンロードのイメージ）



図 10：「分析ツール」から「分析シート」を出力



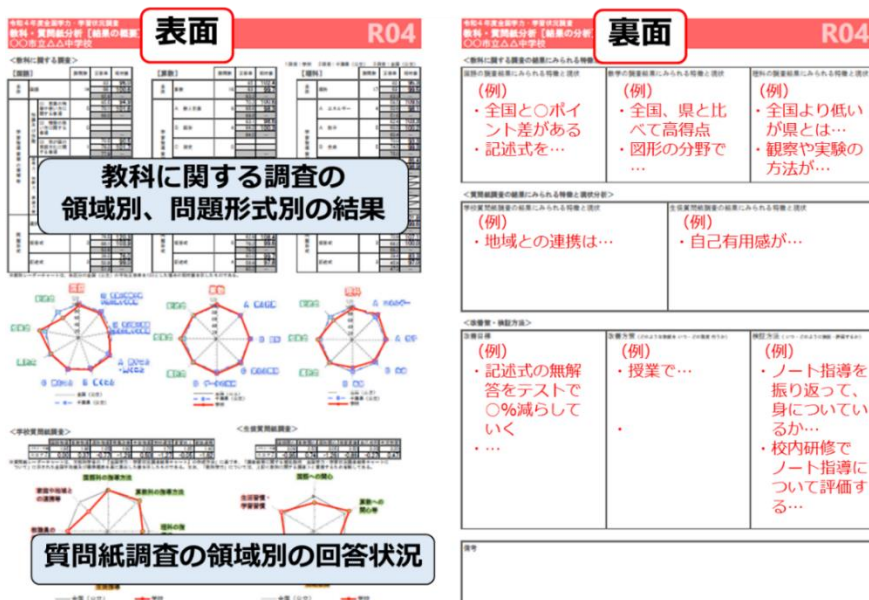
ウ 「分析シート」

4 つの分析シートは、それぞれ以下のように構成しており、目的に応じて活用できる。

○教科・質問紙分析シート

教科に関する調査の結果（領域別、問題形式別）や、質問紙調査への回答状況について分析するためのシートである。表面には、結果状況に関するレーダーチャートを表示し、自校の成果や課題を確認した上で、裏面に、課題に対する改善方策等を書き込む構成とした（図 11）。

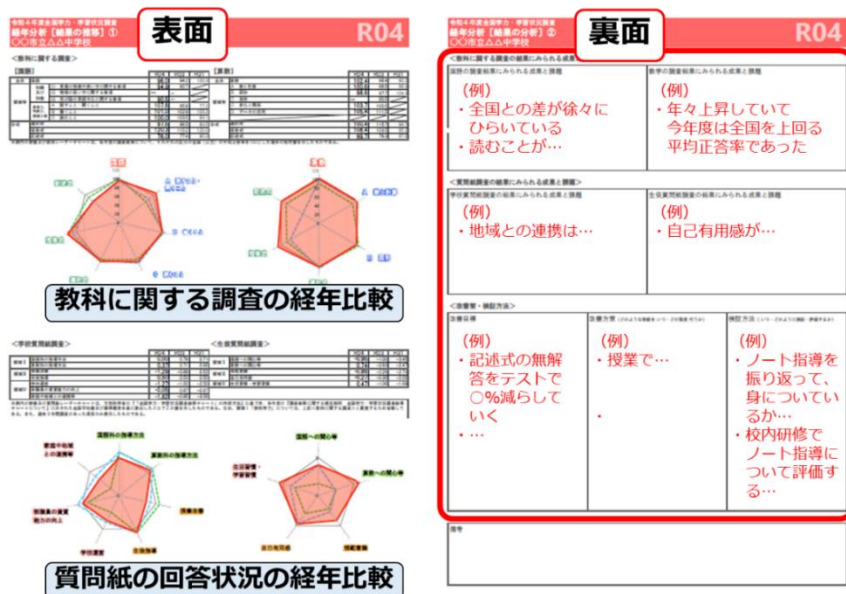
図 11：教科・質問紙分析シート



○経年分析シート

教科に関する調査における結果や、質問紙調査への回答状況について経年分析するためのシートである。表面には、今年度を含む過去 3 回分の結果状況を表示し、課題解決に向けて取り組んだ改善状況を確認した上で、裏面に、経年分析による成果と課題をまとめ、今後の改善方策等を書き込む構成とした（図 12）。

図 12：経年分析シート



○誤答分析シート

各設問に対する解答状況から課題を分析し、授業改善へ向けた方策を検討するためのシートである。表面には、解答類型ごとの反応率（解答した割合）の状況を表示し、裏面に、誤答の特徴を分析し課題に対する改善方策等を書き込む構成とした（図13）。

図13：誤答分析シート



○クロス集計シート

教科に関する調査結果と、質問紙調査への回答状況の相関関係について分析するためのシートである。表面には、教科別に調査結果を正答率の高い順に25%ずつに4つに分けた学力層（四分位）ごとに、特定の質問紙調査への回答状況をまとめている。裏面には、特定の質問紙調査への回答状況ごとに、教科に関する調査結果を記載する構成とした（図14）。

図14：クロス集計シート



エ 活用促進に向けた取組

活用促進に向けて、「学力向上の手引き」を発行するとともに、各種研修を実施した。

○「学力向上の手引き」発行

今年度の調査結果に関する分析内容をまとめ、学校現場で活用しやすい形で作成した。

【掲載内容】

- I 全国学力・学習状況調査の概要
- II 令和4年度 千葉県の調査結果
- III 県の分析ツールの活用について
- IV 質問紙調査回答結果集計データ

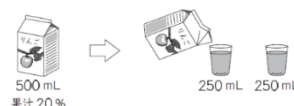
特に、「II 令和4年度 千葉県の調査結果」では、教科別に、本県結果として課題が見られる設問を取り上げ、反応率を示しながら児童生徒の誤答を分析し、改善のポイントをまとめた。ここでは、例として、小学校算数の設問を示す（図15）。

図15：課題のある設問（小学校算数2(3) 割合の問題）

(3) リンゴの果汁が20%ふくまれている飲み物が500 mLあります。

この飲み物を2人で等しく分けると、1人分は250 mLになります。

250 mLの飲み物にふくまれている果汁の割合について、次のようにまとめます。



全国と千葉県との比較	
正答率(%)	
全 国	21.4
千葉県	20.5
自 校	

250 mLは、500 mLの $\frac{1}{2}$ の量です。

このとき、ア

上のアにあてはまる文を、下の1から3までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 飲み物の量が $\frac{1}{2}$ になると、果汁の割合も $\frac{1}{2}$ になります。
- 2 飲み物の量が $\frac{1}{2}$ になると、果汁の割合は2倍になります。
- 3 飲み物の量が $\frac{1}{2}$ になっても、果汁の割合は変わりません。

正 答

解答類型別に誤答の反応率をみてみましょう！

解 答 類 型		反 応 率 (%)
1	1 と解答しているもの 果汁が20%含まれている飲み物を二人で等しく分けたとき、飲み物の量が$\frac{1}{2}$になると、同様に果汁の割合も$\frac{1}{2}$になると誤って捉えていると考えられる。	全 国 67.9 千葉県 68.8 自 校 ()
2	2 と解答しているもの 果汁が20%含まれている飲み物を二人で等しく分けたとき、飲み物の量が$\frac{1}{2}$になるが、果汁の割合は2倍になると誤って捉えていると考えられる。	全 国 9.3 千葉県 9.1 自 校 ()

日常の具体的な場面に対応させながら、割合について理解できるようにするには

本設問を用いた指導の工夫

生活体験（飲み物を二つに等しく分けても、濃さは変わらない）を想起させる。
⇒「飲み物の量に対する果汁の量の割合は変わらない」と判断する活動を取り入れる。



・割合は、飲み物の濃さを表しており、量を半分にしても、濃さは変わらないため、割合も変わらないと考えられる。

○各種研修における説明・演習

本県の調査結果概要や、分析ツールの活用方法、「学力向上の手引き」の活用方法等について説明するとともに、対象に応じてワークショップ形式の演習を行った（図 16）。なお、演習テーマとして「誤答分析」「教科等横断的な視点からの問題分析」「（指導主事から）学校への指導助言の在り方」等を取り上げた。

【今年度実績】

- ①活用研修会（対象：市町村教育委員会指導主事）
- ②学力向上に向けての研修会（対象：教育事務所指導主事）
- ③研修企画部が実施する各種研修（対象：初任者教員、長期研修生、教務主任、新任校長）
- ④カリキュラム開発部が実施する講座（対象：中堅教員）

図 16：研修の様子（ワークショップ）



各研修後のアンケート調査において、以下のとおり前向きな回答を得ており、今後の活用充実が期待される。

【アンケート回答 ※抜粋】

- ・結果分析を活用して授業改善、学力向上につなげていくことの意義を改めて感じた。学校の管理職、教務主任、研究主任に伝える機会を設ける必要性を感じた。（教育事務所指導主事）
- ・解答類型から分析して、どこでつまづいているのか考えたり、どのように指導したら良いのか工夫したりすることを、普段の授業から大切にしたい。（初任者教員）
- ・問題を教科等横断的な視点で読み取ることを学べたので、自分の担当教科だけでなく他教科にも目を向けて活用していきたい。授業づくりや学力向上に生かせる分析、活用が図れるよう、研究主任の先生とよく話をしていきたいと思った。（中堅教員）

6 研究のまとめ

教科に関する調査結果と質問紙調査への回答状況の相関関係を分析し、授業改善のポイントとしてまとめた。また、調査問題あるいは調査結果の活用を促進するにあたり、県独自の分析ツールを作成・提供するとともに、教員や指導主事に対して調査の活用方法等に関する研修を行った。今後も、教員や指導主事の声に耳を傾けながら、活用についての取組をさらに充実させることで、児童生徒の学力向上を図りたい。